

1 つれなき麗しの妖精

- 1 おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で
ただひとり 顔蒼ざめて彷徨うは
菅草は 湖の辺に萎れ果て
歌うたう 鳥もなし
- 2 おお 何がそなたを苦しめる 哀れな姿で
かくやつれ かく悲しむは
栗鼠の穀倉は 蓄えに満ち
収穫は いまや了りぬ
- 3 そなたの額は 百合の花色に染まりゆき
苦悶に濡れ 熱き玉汗にじみ出ず
そなたの頬の 薔薇の花色移ろいて
瞬く間もなく 萎れて果てぬ
- 4 草原にめぐり逢いしは ひとりのおかた
いと麗しく さながら奇しき妖精のごと
そのかたの御髪はなびき 御足は軽く
そのかたの御目は怪しき
- 5 跑足に進む駿馬にそのかたを乗せ
ひもすがら ほかに目移ろうことぞなし
かたわらにそのかたは身を寄せ 歌うたう
さながら奇しき妖精の歌
- 6 そのかたの頭に われは花輪捧げぬ
花の腕輪 花薰る飾り帯も
そのかたは 恋するごとくわれをみつめて
甘き呻きの声こそ 発てぬ
- 7 そのかたは われにみつけれぬ
甘き草の根 野の蜜とマナの露
不思議な言葉で 紛うかたなくそのかた言いぬ
「真実 そなたを愛しています」
- 8 そのかたは 奇しき洞穴にわれを誘ない
してそこで われを見つめて深きため息
われは 優しき接吻をもて
そのかたの 怪しき悲しき 顔を閉じぬ

- 9 してそこで 苔むす石を枕に二人して眠りに落ちぬ
われは夢みぬ ああ 呪^{のろ}わしき夢
今しがた 夢みし夢よ
冷たき丘の中腹^{かたわら}で
- 10 われは見し 蒼ざめし王や王子ら
蒼ざめし兵士ら みな死人のごとく蒼白く
彼ら叫びぬ 「つれなき 麗^{うるわ}しの妖精
そなたを捕えぬ！」
- 11 われは見し 黄昏^{たそがれ}のなか彼らのやつれし 唇^{くちびる}が
忌^いまわしき 警^{いまし}めをもて うち開かるを
してわれは 目覚めてここにわれを見ぬ
冷たき丘の中腹^{かたわら}に
- 12 しかしてわれはここにあり
ただひとり 顔蒼ざめて彷徨^{さまよ}いつ
菅草^{いすみ}は 湖^{かた}の辺に萎れ果て
歌うたう 鳥もなけれど

（山中光義訳）